おおみ
大海小学校 学校だより
第7号
十月十五日
秋の遠足
低学年
高松運動公園
11月

ノーベル賞受賞　大村先生の心に学ぶ

校長　　油井　宏樹

秋の深まりとともに、校長室から見える景色も赤や黄色で彩られる季節になりました。その美しさに誘われて、週末には紅葉狩りに出かけるご家庭もあると思います。世界の国々の中で、とりわけ日本の紅葉は美しいと言われていますが、それは日本の素晴らしい気候風土のなせる技です。四季がもつそれぞれの良さを肌で感じ取ってほしいと思います。

さて、日本人として２３人目の快挙。ノーベル生理学・医学賞に、北里大学特別栄誉教授の大村智（さとし）さんが輝きました。失明を防ぐ特効薬（イベルメクチン）の功績が認められました。日本における研究が高い水準にあるということを再認識しました。報道されてすごい人がいるものだと感心しましたが、皆さんはご存知でしたでしょうか。残念なのは、そのような研究者の存在を受賞するまでほとんどの人が知らないということです。私も全く知りませんでした。

その大村さんの生い立ちや家庭環境が新聞や雑誌で紹介されています。

村の有力者である父と小学校教師だった母の間に生まれた５人兄弟の長男。喧嘩っ早いガキ大将でしたが、家の中ではまるで違っていて、寝る前は必ず家族全員のもとに行き、正座して「お父様、おやすみなさい。」「お母様、おやすみなさい。」と言うのが習慣でした。親の躾も厳しく、食事も家族全員が揃わなければ始まらなかったようです。

学校以外の時間は農作業を手伝って、落ち葉などを拾い、堆肥作りを自分でしていました。その時、微生物の力で発酵し、６０度近くにもなる堆肥の温度に触れたことが科学に目覚めた瞬間だったのです。

また、スポーツが得意で、高校時代は卓球の国体選手に、山梨大学時代はスキーに没頭し、国体選手にもなっています。本格的にスポーツの道に進んでいたらスポーツで大成していたかもしれません。

時が過ぎ、ある日、微生物の研究者として職業に携わり、ゴルフを楽しみながらゴルフ場の土やカビのサンプルを持ち帰り、微生物の研究に没頭しました。全国を歩いて土の中から６０００種の微生物を採取し、熱帯地方の風土病オンコセルカ症やリンパ系フィラリア症の特効薬を作りました。それがノーベル賞につながりました。

大村さんは、風土病の特効薬イベルメクチンだけでなく、これまで２６もの医薬品の商品化に成功しています。結果としてお金もたくさん儲けました。でも、それを自分のために使うのではなく、社会のため、みんなのために使いました。例えば、大学の研究費に寄付したり、地元に美術館や温泉施設、学校を作ったりもしました。

「自分は御飯だけ食べることができれば十分。儲けたお金は、生まれ故郷韮崎（にらさき）やこれからの若い人に使ってほしい。」と贅沢はせず、大変質素な生活を送っています。

久しぶりに面白い研究者が出たような気がします。まだまだ日本人も捨てたものじゃない―そんな気持ちにさせる大村智先生でした。